

觀音、地藏の大乗菩薩の精神と現代社会

張總
菅野博史 訳

觀音と地藏は中国からアジアに至るまでの仏教のかで最も影響のある大菩薩であり、大乗仏教の精神を見事に表現している。菩薩の自利・利他の精神は、古代社会において、軽視することのできない重要な作用を發揮した。悲、智、行、願の精神は、四大菩薩、すなわち觀音・文殊・普賢・地藏の諸尊のなかで体现され、觀音の悲愍、慈愛、苦難の救濟、慈悲と智慧をどちらも働かせる精神、地藏菩薩の大願を立てて苦行すること、孝養の道、死者を救済する行為は、すべて古代社会が個人の運命や究極的関心に対して無視するこ

る回鶻（ウイグル）、于闐（コーラン）、ソグドなどの民族にはすべて觀音と地藏の信仰の痕跡と文物がある。農業形態の封建社会のなかで、觀音、地藏の信仰はかつて存在した強大な信仰であったが、工業化し、商品経済の発達した社会のなかで、どのように認識し対処すべきか、これは我々が今日直面する重要な課題の一つである。

一 觀音、地藏菩薩の信仰の流布

菩薩は梵語のボーディ・サットヴァに由来し、菩提薩埵と音訛し、菩薩と略す。また「覺有情」「發大願宏誓」ともいい、大願心を生じ、実践の意を与えた。菩薩行は、六度万行⁽¹⁾を修習することであり、身を捨てて虎に食わせ、肉を割いて鳩の身代わりとなり、人々に代わって地獄に入つて苦を受け、衆生を捨てて自分だけ成仏することを願わない。菩薩の特質は、三界を超出し、涅槃に入り、成仏覚悟ができるけれども、そうしないことであり、濁世にとどまり、衆生を救うことである。菩薩は業力に左右されず、願に乗じ

とができず欠くことのできない要素である。国際学術界のためまない努力によって、觀音と地藏の信仰が古代社会のなかで広範に伝播していた事実は日に日に明らかとなっている。現在知られているところでは、今まで伝承された漢地の漢語系仏教とチベット・モンゴル地区のチベット仏教に早くから觀音信仰の經典造像、靈妙な効驗の跡があるだけでなく、たとえ今日存在しなくとも、たとえば歴史上タンゲート民族が建てた西夏国や烏賊、白賊族が立てた南詔国、大理国、さらにはイスラーム教やゾロアスター教などを信仰す

て來り、苦を救い難を救い、大慈悲を持ち、自由自在な崇高な境界を備えている。仏教の核心思想の一つは業力である。業は梵語のカルマ（羯磨と音訛する）⁽²⁾であり、有情の行為、すなわち為すこと、行為、意志などの身心の活動を意味し、あるいは意志によつて引き起こされる身心の活動を意味する。業と因果は互いに関係し、いかなる業をなしても、すべて相應する後の果を引き起こす。有情の作る善惡の業は、必ず相應する苦樂、異熟の果報を引き起こす。各種の苦樂の報應は、三世と六道の輪廻のなかで実現するはずである。有情衆生の種々の差別は、自身の行為の結果を得たものであり、すべて業力のうえに形成される。一切衆生のもつすべての果報は、必然的に業力によつて招かれ感得されたものである。つまり、有情衆生が三世、六道の輪廻のなかでぐるぐると流転するのは、すべて業力によつて決定されたものである。もししつかりと八正道を守り、成仏の道を歩めば、輪廻を超出し、完全な涅槃に達し、成仏覚悟ができる。仏の前生の物語は我々に、釈迦佛が幾世にもわたつて修行をしたこ

とがあり、ついに覺悟証道することができたことを語っている。諸大菩薩は六度を行じ、衆生を救い、非常に善良で、功德が無量であり、本来、輪廻を出て、生死を越え、成仏得道することができるが、大菩薩はかえつて広く深い偉大な誓いの願力によつて、濁世に来り、久しく娑婆に住し、衆生に近づいて、有情を救済する。觀音は生を救い、地藏は死を司る。釈迦仏の滅度以後、弥勒仏の下生以前、地藏菩薩は人々の死後の世界である冥府において判決を下し、地獄のなかの苦難を救う。觀音菩薩は人々の生活のなかで苦難を聞き知り、救済して止まない。したがつて、觀音と地藏は人々に最も身近な大菩薩である。仏教が中国に伝來し、さらにはアジアの多くの国に伝わつてから、觀音と地藏はどちらも最も崇拜された大菩薩である。

(一) 観音信仰の諸民族、地域における現われ

觀音信仰は古代社会のなかで、一時期大流行したことがあるが、一部の情況はすでに複雑でよくわからなくなつてゐる。考古、文物の事業が今日獲得した業績

にともない、さらに言語、民族などの學問分野の進展があり、古代社会のなかの于闐、回鶻、ソグド、タングート、契丹、モンゴル、チベットなどの民族の觀音信仰と流傳の情況は日に日に明らかとなり、特に新疆地区、西夏王朝のタンゲート民族などの方面の觀音經典、図像材料の刊行頒布と研究が日に日に増え、これらの貴重で稀少な材料は、これらの民族、地域の觀音信仰が自己の特色を持つており、漢地の觀音信仰のかには備えていない内容を持つていたことを説明している。したがつて、これらの學術活動に対する整理を重視し強化することは、觀音信仰の広範な流行を理解するのに大いに意義がある。

新疆地区は、民族、宗教の交流変化が最も複雑な地である。現在、すでに于闐語と回鶻語系にはすべて觀音經典があり、さらに石窟、寺院の遺跡や、出土した絹画などの藝術作品があり、觀音信仰と圖像のかつての流布分布を説明していることが知られてゐる。

[于闐について]

タリム盆地の南辺に位置する古于闐国（今の和山地

区）は、漢代は西域都護府の管轄に属し、唐の後期には吐蕃に占領され、五代の時には後晋に封じられて「大宝于闐国」となり、宋代の景德三年（1006）にカラ・ハーン王朝に滅ぼされた。タリム盆地の北端の亀茲地区に相対して、于闐は大乗佛教が発達した地であるが、菩薩の跡はけつして多くない。敦煌藏經洞の文書のなかには、いくつかの『般若心經』、個別の觀音經、一、二の觀音像がある。『般若波羅蜜多心經』の于闐語本は、フランスのペリオ3510号貝葉本のなかに所蔵されており、西暦九六五年前後に、梵本から訳された。⁽³⁾『般若心經疏』の于闐語本もまたある種の梵本から訳された。⁽⁴⁾于闐の字体の梵文には『帝釈般若心經』（ペリオ2925など三件）があり、さらに于闐韻文体の書写の三つの『法華經綱要』があり、そのなかのペリオ2782の巻尾の供養人の題記には劉再昇という名があり、彼は五代の天福七年（942）に中原の後晋に来て入貢した于闐の使節であり、この写本は彼が途中敦煌を経由したときに留めたものである。⁽⁵⁾貴重な于闐文の觀音經にはさらにペリオ5532号『不空羣索観心經』⁽⁶⁾や、フラン

ス所蔵のペリオ4694号の于闐の發願文の写本の前面に六臂觀音の白描像がある。敦煌の漢文遺書のなかに四種があり、瑞像の図画の脇書があり、イギリス所蔵のスタイン5659号などの漢文写本は于闐を救助する觀世音、弥勒、虛空藏、宝壇花の四大菩薩を列出し、于闐文、およびチベット文の写本、たとえばペリオ2893とP.T.960はすべて于闐を護衛する八大菩薩を挙げ、その中にも觀音がいる。要するに于闐の觀音の經と像は比較的少ないけれども、やはり貴重な遺物がある。

[回鶻について]

回鶻民族は、今の維吾爾族（ウイグル）の前身であり、その文字、文化は周囲の民族に対しても大きな影響を生み出したことがある。回鶻文は、中央アジアのソグド文に由来し、西暦八四〇年から、十四世紀に回鶻がゴビ砂漠の北から西の新疆と河西地区に移るまで、ずっと回鶻文字を使い、モンゴル文字、満州文字はすべて回鶻の文字に由来する。『法華經』は回鶻の人々のなかで多く流傳し、現存するいくつかの残巻は、『法華經』のなかで觀音について説く「普門品」が最も流行

したことを証明する」とができる。現在知られているのは、トルファンから出土し、それぞれロシアに所蔵されている巻子本、日本に所蔵されている梵本、ドイツに所蔵されている二件（交河の故城から出土）と出土地不明の一件の残卷は、すべて「普門品」の内容である。また、窓基の作った『妙法蓮華經玄贊』にも回鶴文の翻訳があり、主にスウェーデン所蔵の残葉、日本の羽田亭所蔵の写真、フランス所蔵本、ドイツ所蔵本がある。

回鶴文の『觀無量壽經』も発見されたが、回

鶴文の觀音經で最も特色のあるものは、一種の韻文体

の『觀音經相應譬喻譚』であり、古代の回鶴の仏教界

のために『觀音經』を講説し、また歌うことのできる文書である。その具体的な形態は、頭韻を踏んだ四行詩であり、多くの箇所に漢字が入りまじっている。イ

ギリスの国家図書館はOr.8212号(15A)を所蔵しており、十五頁三百四十六行を保存しており、元代の敦煌写本に属すはずであり、ただし文句のなかの「……為首高

昌國官員和人民一起」から、もと高昌地区⁽¹⁰⁾で書写されたものとわかる。北京大学図書館に保存する附T2と

があり、これは高昌回鶴の宗教のなかの密教の觀音が重要な地位を持つてゐることを物語つてゐる。

〔ソグドについて〕

中央アジアのアムダリヤ、シルダリヤ河地区的ソグド族は商売が上手で、兩漢の後、中国に来て商売をする人が多く、多くの移民が集まり中国に留まつて生活し、彼らが信奉するゾロアスター教の信仰も中国で流傳し、同時に仏教思想と芸術もソグドの人々の生活に浸透した。昭武の九姓である康、安、曹、史、石、米、何などの姓氏の人々のなかには、多くの芸術家があり、北斉の曹仲達、唐代の康薩陀はいざれも著名で影響のソグド文の仏教經典、特に觀音經の存在から、觀音信仰がソグドの商人の生活のなかで地位を保つていたことがわかる。ソグド語は、印歐語系のイラン族中古東部方言の一つに属し、敦煌藏經洞のなかの数種のソグド文の仏教經典、特に觀音經の存在から、觀音信仰がソグドの商人の生活のなかで地位を保つていたことがわかる。ソグド語の經は主に漢文仏典から訳されたことが現在知られている。たとえば『不空羈索神呪心經訳本』、『觀世音菩薩秘密藏如意輪神呪經訳本』、『聖觀自在一百八名

附T3の「*一いおまたい*」の經であるが、その年代はイギリス所蔵本よりやや前に早い。⁽¹¹⁾

回鶴人が建造した仏教石窟には、敦煌、トルファン、龜茲地区のそれぞれの石窟があり、寺院には著名な北庭の大寺があり、今、遺址がある。トルファンのベゼクリク石窟の壁画の内容には、法華經變、大悲觀音、千手觀音、不空羈索觀音、淨土圖画などがある。トルファンの北庭の大寺の遺址の壁画には、西方淨土變、觀無量壽經變、馬頭觀音像などがあり、これらの経變・画は多く回鶴文字の經文に基づいて描いたものである。高昌の故城E址B寺から出土した絹画は、十一から十二世紀の高昌回鶴の作品に属すはずであり、千手觀音が日月、宮殿、象鉤、法螺などの法器を手に持ち、千手觀音の傍らに脇侍として馬頭觀音、白衣觀音があり、さらに大自在天、雪山女神、忿怒金剛などがあるのを描いており、最も特徴的なことは、回鶴の服装を着た供養人であり、さらに画面には隨意な円頂の寺院建築を配置していることである。画面の全体はやはり唐代の格調に合致し、細部にはかなり回鶴の特色

附T3の「*一いおまたい*」の經であるが、その年代はイギリス所蔵本よりやや前に早い。⁽¹¹⁾

回鶴人が建造した仏教石窟には、敦煌、トルファン、

龜茲地区のそれぞれの石窟があり、寺院には著名な北

庭

の大寺があり、今、遺址がある。トルファンのベゼクリク石窟の壁画の内容には、法華經變、大悲觀音、千手觀音、不空羈索觀音、淨土圖画などがある。トル

ファンの北庭の大寺の遺址の壁画には、西方淨土變、觀無量壽經變、馬頭觀音像などがあり、これらの経

變・画は多く回鶴文字の經文に基づいて描いたものである。高昌の故城E址B寺から出土した絹画は、十一から十二世紀の高昌回鶴の作品に属すはずであり、千

手觀音が日月、宮殿、象鉤、法螺などの法器を手に持

ち、千手觀音の傍らに脇侍として馬頭觀音、白衣觀音

があり、さらに大自在天、雪山女神、忿怒金剛などが

あるのを描いており、最も特徴的なことは、回鶴の服装を着た供養人であり、さらに画面には隨意な円頂の寺院建築を配置していることである。画面の全体はや

はり唐代の格調に合致し、細部にはかなり回鶴の特色

経贊」などである。⁽¹²⁾ フランス所蔵の『不空羈索神呪心經訳本』は唐の菩提流支訳『不空羈索神呪心經』と最も接近しているが、また梵本を参照し補充して訳は完成した。⁽¹³⁾ そして、『秘密藏如意輪陀羅尼神呪經』は唐の実叉難陀の漢訳の同名の經本から訳された。⁽¹⁴⁾ 『如意輪念誦儀軌』は、唐代の不空の漢訳本の同名經に由来し、また仏部三昧耶印圖を描いた。⁽¹⁵⁾ 『觀自在菩薩一百八名贊』は、ソグド語の編集本であり、紙背に『仏名并陀羅尼』という漢文の名を題し、その部分の文字は梵文のソグドの音訳であり、その回向發願文は、編訳の目的が敦煌に住む康姓一族のために功德を求めて得ることであることを明らかにしている。梵文『大悲呪 Or.8212号(175)』はバラーフミー文字で書写され、そのなかには六十行のソグド文字の対応する音訳が書き込まれている。これららの觀音經の訳本は唐代の密教の觀音のなかの不空羈索、如意輪、千手觀音がソグド民族のなかでかなりの影響があつたことを物語ついている。

(二)『親集耳伝觀音供養贊嘆』などの韻文体の觀音偈贊

近年、刊行頒布した西夏の経書、文献、図絵など、

皇建二年六月二十五日重依觀行對勘定
畢 永為真本

永為真本

音信仰が十分に流行し、西夏の文物のなかの觀音の絵と版画がとりわけ注意すべきであることを説明した。莫高、榆林などの石窟の作品も、西夏時代の『水月觀

耳伝觀音供養贊嘆』は特別な存在であるが、まだ十分には研究されていない。ロシアのコズロフは一九〇七年と一九二四年の二度、今の内蒙古のエジナ旗の黒水城の遺址に来て、多くの文物を発掘したが、そのなかにこの経本があつたにちがいない。以後、その巻は敦煌文獻のなかに混入して『俄藏敦煌文献』⁽¹⁸⁾のなかの俄⁽¹⁹⁾として刊行され、府憲展先生によつて西夏の文獻であることが鑑定識別された。

この漢文写本の最後の四行は書写者と校訂者の附記である。

る。

皇建元年十二月十五日
門資宗密沙門
本明
依師刹門標授中集
畢

たものかもしれない。さまざまなものから見ると、この経の偈集と『大乗莊嚴魔王經』との関係は普通ではない。たとえば『莊嚴魔王經』卷一のなかで阿鼻地獄のために、これは觀音菩薩が地獄を化度しようとして現じたものであると説いた。そして、『親集贊嘆』のなかの『贊呪功德偈』に、

通を現じ、除蓋は見て、
は親ら六字の功を説く。

菩薩は昔、地獄の中に在りて、祇陀の仏会にて神通を現じ、除蓋は見て疑い、因りて請問し、世尊は親ら六字の功を説く。

その時代は西暦一二一一年一月一日から一二二一年七月二十六日まであり、金代の衛紹王の大安三年、南宋の寧宗の嘉定四年に相当する。

この経本は、多くの種類の偈贊を集めたものであり、ある種の懺悔供儀のために使用する贊詞があるいは曼荼羅壇を修する時の専用文であるにちがいない。この偈集の中には五十三個の小さな標題を列挙しており、多くは偈贊の名である。たとえば、增長定偈、召請智仏偈、不空牟尼供養偈、奉十種供養偈、□□誦呪偈、振鈴偈、礼贊上師偈、勾召亡魂偈、施財安位偈、奉曼荼羅偈などである。その密教の色彩はとても濃く、曼荼羅偈は多く出現し、さらに反復して念誦する呪語がある。多くの所で馬頭觀音を説き、さらに觀音六趣、六度などがある。そのうえチベット仏教と関係が密接であり、多くの所で上師について言及し、一ヵ所で「大手印」について言及し、一般の密教ではないことがわかり、あるいは訳の原本がチベット語の文献から來

【莊嚴魔王經】の貝葉本があり、伝説によれば、この経はとても早くチベットに伝入した。つまり西暦四、五世紀の時、チベット王ラトトリニヤンツエンが空中からこの経を得て、後にソンツエンガンポがトンミサンポータをネパールに派遣して本経の梵本を得させ、チベット語に訳して、後にチベットに持つていった。

また研究によれば、『印度文獻史』(仏教文庫)第七章のなかに、もっぱら觀音菩薩について述べる一部の大乗經があることを説いており、その具名を『觀世音功德籠詳記』といい、内容は『大乘莊嚴寶王經』と対応させることができる。⁽¹⁹⁾ この經の両種の經本のなかで、散文体を早い成立とし、偈頌体を遅い成立とする。その散文体の第二章に、六字の明呪を賛嘆する密教の呪願、

此の六字の大明呪は、是れ觀世音菩薩の微妙なる本心なり。若し是の微妙なる本心を知ること有らば、即ち解脱を知る。

いる。『大乗莊嚴魔王經』にもまたこの意義があり、特にこの西夏の偈集『贊呪功德偈』に、六字の明王神呪尊は、即ち是れ觀音の妙本心なり。とある。これは上述の定義と完全に合致している。この偈集のなかにはさらに觀音菩薩を礼賛する偈がある。大聖慈悲願力最に帰命す。類に隨いて身を現するを、名づけて觀自在と為す。猶お如意珠のごとく能く清心有るに隨う。故に我れは虔敬に蓮花足に頂礼す。

集のなかの偈賛の種類はとても多く、毎段の偈賛の標題の下にはすべて小注があり、どのように拜礼儀式を進めるかなどについて注釈し、そのなかの一部は「亡き弟子」「亡き六道の衆生」などのために福を祈るもので、また死者のために福を求める罪を消すことがわかり、確かに漢地の觀音信仰と異なるところがある。

面白いことは、回鶻文の『觀音經相應譬喻譚』も韻文体であり、三つの部分がすべて韻文で始まっている。敦煌遺書のなかの『觀音偈』、『觀音禮』や宋代の筆記

ろな調子を用いて結合した元代の散曲と似ており、觀音の偈賛には民族、時代の異なりに応じて、きわめて多くの変化があることがわかる。

(三) 諸時代、國家の地蔵信仰

地蔵菩薩の信仰は、中国、朝鮮、韓国、日本のすべてにおいて大変流行した。その形成発展にも大いに特色がある。地蔵の典籍の面には、近年、『地蔵懺儀』、『地蔵菩薩十齋日』、西夏文の『地蔵菩薩本願經』の発見と検討があり、石窟造像の面にも多くの成果がある。唐五代の時の『贊礼地蔵菩薩懺悔發願法』は、北京図書館の敦煌写本、北8422(重22)号によつて世に存在し、その重点は礼賛と懺悔發願にあり、贊儀の偈文は玄奘訳『大乘大集地蔵十輪經』に基づいて作られている。明末の智旭は十科の懺法によって『占察經行法』(日本僧敬首の『地蔵菩薩念誦儀軌』⁽²²⁾はこれと十分に似ている)を制定し、あわせて簡便で行ないやすい『贊礼地蔵懺發願』を作つた。『慈悲地蔵懺儀』のなかには父母のために追福するなどの内容があり、かつ大量の中国に典拠

と。

集のなかの偈賛の種類はとても多く、毎段の偈賛の標題の下にはすべて小注があり、どのように拜礼儀式を進めるかなどについて注釈し、そのなかの一部は「亡き弟子」「亡き六道の衆生」などのために福を祈るもので、また死者のために福を求める罪を消すことがわかり、確かに漢地の觀音信仰と異なるところがある。

面白いことは、回鶻文の『觀音經相應譬喻譚』も韻文体であり、三つの部分がすべて韻文で始まっている。敦煌遺書のなかの『觀音偈』、『觀音禮』や宋代の筆記

のある伝説を含んでいる。『地蔵慈悲救苦薦福道場儀』は民間の地蔵懺儀の重要な手本となり、雲南の明清の阿吒力教の僧は地蔵法会を催して、常に科儀を行い、『地蔵菩薩本願經』に基づいて作られており、親族ために死者を済度し追福し、あるいは自身のために消災修福した。総合的に見ると、懺儀はまず『地蔵十輪經』に依り、ついで『地蔵三經』を同様に重んじ、後に『地蔵本願經』などの本を重んじた。敦煌遺書に多く出現した『地蔵菩薩十齋日』は、四川省大足県の宝頂山の地蔵地獄変相に刻まれており、いすれも十地獄の影刻に配当されている。この短い経本の儀軌は、その形成発展に、三系統、八種の錄文があり、また八閻齋戒と密接に関係しており、仏を信ずる俗衆は、毎月十回の齋日に、どんな種類の軌範に従い、いかなる仏・菩薩の名号を念すれば、地獄の諸災を受けず、しかもいかなる福を獲得できるはずなのかを説いている。『地蔵菩薩本願經』は莫高窟北区の考古品のなかに出土した残巻があり、これは世にも貴重な活字印刷本の仏教経典である。また地蔵の方面の經典は、回鶻人のなかで

録に記録されたもの、金元の時代の『觀音偈』などは、すべて韻文体で觀音偈賛を撰述したものである。敦煌写本の数種の『觀音偈』、『觀音禮』の文はみな同じで、すべて韻文体で「普門品」の内容を撰述したものである。研究によれば、觀音の礼懺のなかで使用したものにちがいない。⁽²³⁾ 宋代の洪邁『夷堅志』には一則の『觀音偈』を収録しており、内容は心智の面を説くことを重視している。「大智は心に發し、心に於いて尋ねる所無し。一切義を成就し、古も無く亦た今も無し」と。字句もまた汀州の『白衣定光行化偈』と同じであり、その効用はかえつて足の病を治すことであり、物語のなかには、その偈が子供や農夫が長い間患つていた足の病をうまく治したことについているが、とても奇怪である。金元の時代の『觀音偈』、『邙山偈』、『菩提偈』はグループを構成しており、その形式は十分に複雑で、多くの歌うことのできる節、たとえば臨江仙、自東吟、平吟、側吟などの節があり、中間にはさらに話すことのできる「白話」が加えてあり、形式は多様で、唐宋以前の整然とした偈頌体とは異なり、かえつていろいろ

も広く流傳した。研究によれば、回鶴の仏典のなかには、「地藏十王經」などの漢地で撰述された疑偽經典が十分に流行した。回鶴文で図を備えた『仏說十王經』の断簡は、日本の天理図書館、ベルリンにも多くのコレクションがある。本当に回鶴佛教の地獄の觀念と地藏菩薩に対する崇拜を反映したものである。訳本は漢僧の偽經から出ている。⁽²⁵⁾ 日本の地藏菩薩の信仰も大変盛んであり、多くの重要な寺廟のなかにはすべて地藏菩薩像と殿堂があり、さらに多くの古代から保存されている地藏菩薩、地藏十王の画像などがある。日本には民間の祈祷求福がしやすいように、さらに簡略な手法で彫刻した石の地藏の像が街頭に置かれ、子供に対する保護、安全祈願に重点を置いている。韓国の地藏菩薩の信仰も、その地藏の寺廟と地藏の画像の情況から、ほぼその一部分を見ることができる。中国佛教史上、新羅の僧、円光と『占察經』との密接な関係から、金喬覺、つまり金地藏が九華山にやつて來て地藏菩薩の道場を建てるまで、すべて地藏信仰と中国・韓国の佛教の特にすぐれた因縁であり、朝鮮、韓国自身の地

藏菩薩の信仰もまた歴史が長いのである。

二 古代と現代社会のなかの 觀音・地藏菩薩の精神

(一) 古今の大乗菩薩の精神

古代社会のなかの奴隸、封建王朝の時には、社会の構造は農業経済を偏重した。社会の階層、等級の違いは明確であり、特にインドのバラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シユーデーラの四種の姓はそうであった。佛教は極力、不平等に反対し、平等を強調した。しかし、国王、僧侶、士農工商などはやはり存在する必要があり、社会に法治はあるけれども、かえつて人治の基礎の上にあるとした。古代インドの転輪聖王の觀念は、仏教のなかにも十分に流行し重視され、觀音と地藏の信仰のなかにも現われ、特に地藏の冥府の信仰のなかの「十王」の觀念に現わされており、死後の世界の捉の觀念、地獄の審判などは法治ではないけれども、かえつて最後の審判の内実がある。この種の最後の審判は、キリスト教にあり、さらには古代エジプトなど

の原始宗教にもまた存在する。当然、最後の審判は人間の善惡の行為を根拠とし、現代社会が法律の条文を根拠にするのと相違する。しかし、古代社会において地藏菩薩は人間の死後の懲戒と判決において、個人の一生の善惡を根拠としたことに反映され、これは現実の人々の道徳の制限に対しても重要な働きを起こした。

人類の社会形態の発展は、マルクス主義の古典の学説によれば、奴隸、封建、資本主義、社会主義などがあり、経済形態の変化を社会の発展の基礎とすることが、その重要な原理である。現代の社会形態には、公有制、私有制などの基本形式があり、また多種の交叉複合した要素から構成されている。しかし、现代社会は、工業化経済を基礎としており、そしてさらに科学技術を重んずるポスト工業化の段階にまで発展した。社会経済の運動の構成の原則は、商品経済の等価交換であり、社会階層の高下の原則は、分業の理解に取つて代わられ、法則の原則は法律を規則とする。法律は犯罪に対して規定があり、平等な競争に達することを保護しなければならず、公平で合理的な競争は商品経

済の発展の基礎を作り上げる。法律の規定の範囲のうえでは、どのように商品の生産、交換、分配を進めるかについて、やはり大きな選択の余地と人による区別があり、そのなかにはやはり不合理、不平等な部分が存在する。したがって、精神の教化と倫理道徳の働きは依然として最も重要な役割を果たしており、社会の構成と安定した発展のなかで欠くべからざるレベルなのである。精神の教化、究極的関心の面において、仏教は古い歴史を持つ伝統的な宗教として、悠久で豊富な財産が埋蔵されている。社会倫理の範囲の面では、仏教の大乗菩薩行の社会に普及するという入世（出世、出世間の反対語で、積極的に現実の世間、社会に参加すること——訳者注）の精神には、非常に高いレベルがあり、觀音と地藏の慈悲と悲願の精神は、やはり代替することができない価値と働きを持っている。

(二) 古今の大乗菩薩の精神

地藏信仰の相違と直面する課題

初期佛教の社会政治思想の内容は比較的少ない。仏

教の思想体系は根本的にやはり思弁性であり、人間が偉大な悟りを得ることを趣旨とし、哲学の傾向と来世の傾向が突出している。したがって、社会政治との関係は比較的少なく、社会政治に関するいくつつかの教義は、三歳に散見するが、確かに少ない。佛教の社会政治思想を受けたアショーカ王の例はあるけれども、ただそれだけであつて、それ以後、アショーカ王と同様に佛教の社会政治思想を受け入れたものはとても少ない。佛教の社会的意義は二つの問題に集中している。つまり、世襲の種姓制度を認めず、人々の社会的地位はその価値、行為、性格によつて決定されるのであって、自らの血統と出身によつて決まるのではない。ブッダは人々の生計を立てる方法には、正しいものと誤ったものとの二種があると考え、倫理に合わない職業、たとえば食肉処理業者、毒を販売する商人、武器製造の商人などを承認するのを拒絶し、根本的に禁止した。政治の面では、仏教は、政府が当然動物（一切有情）を含む人民の福利をできるだけ向上させるべきであると考えている。宗教は国民生活の基礎であるべきで、サ

ンガは供養を受け、道徳は励まされる。素朴かつ崇高な理想は、転輪聖王、あるいは法王身のうえに体現され、アショーカ王はその模範である。たとえ現代社会からいっても、佛教のこれらの理想は十分に合理的であり、宗教の極端な主義を含まない。⁽²⁶⁾

大乗佛教の菩薩行は、古代に深く浸透して普及し、またその社会経済の形態と大いに関係がある。封建社会では、農業耕作経済を主体とし、生産力は比較的低かった。天に頼つて飯を食い、自然に依存し、人々は自身の運命に対して理解し把握することができなかつたので、しばしば種々の天災、人災の前で困惑する。人々は宗教にすがり、仏教の諸神、あるいは種々の神靈にすがり、自分が天災・人災を乗り越えることができる、安らかで心配がないように神が保護することができるように希望する。觀世音菩薩は苦を救い難を救い、人々の精神の空虚と困惑とを解決することができるので、とても広範な信仰と尊敬を得ることができ、さらには社会を安定させる面において機能した。

しかし、現代の工業社会の形態のもとでは、情況に

は異なるところがあり、一方では工業科学技術の発展も新しい問題をもたらし、他方では古代宗教も現代社会に適応する必要がある。現代社会の発展によつて、科学は繁栄し、技術は進み、生活と医療の条件は改善し、人口の増加が激化し、寿命もまた大いに延びている。同時に出現したものにも、多くの現代社会の問題がある。ポスト工業と呼ばれる社会の欠点がある。主に事故、環境汚染、種の絶滅などのいくつかの大きな面があり、人間と自然の不調和という重大な問題を生み出した。現代の条件のもとで、多くの面で、数十年間に作られた問題は、以前の数千年間、さらにそれ以上の年数の問題の蓄積を超過した。さらにたとえば天災・人災の面では、地震と火山の災害はけつして避けることができず、予報さえ難くなつていている。現代社会の人口の集中、建築の高層化によつて、地震が引き起こす傷害・死亡は、逆に古代に比べてさらに重大になつた。人災の面は、さらに恐ろしい。たとえば工業生産のなかに持ち込まれた災禍については、採掘化学工業、原子力発電の企業にはすべて一定の割合の事故

の発生がある。交通事故は、自動車、汽車、飛行機、汽船などの種々の乗り物のなかにすべてあり、全世界で毎年これによつて死亡する人の数は、古代社会のいくつかの戦争とさえ比べることができるほどである。現代の科学技術の発展も、軍事武器の殺傷力をきわめて大きく強化した。現代の工業がもたらした環境悪化、砂漠化、大気汚染、温室効果、水資源の浪費、有毒物質の排出は、すでに人類自身の生存に対する脅威となつていて。多くの貴重な動物は、経済価値によつて捕殺されている。人間とともに自然のなかに存在する動植物は、すでに人類自身の生存に対する脅威となつてはすでに人類自身の生殖能力の下降をもたらし、クローン技術などはすでに社会に新しい倫理問題に直面するよう迫っている。現代社会の経済発達がもたらした負の面の影響は、我々に大乗佛教の菩薩行について、やはり力を込めて提唱する必要があることを告げている。人類から動物などの生命に至る一切有情を重視する仏教の願心は、やはり現代社会の病弊をすばりと突いており、觀音と地蔵の慈悲憐憫の願は、現代社

会の種々の事件や環境のなかで、人類の心に対する慰謝、昇昇、淨化であり、確かに軽視することができない働きがある。

しかし、古代と現代社会のなかの菩薩信仰の形式は、同じであるはずがなく、また同じであるべきでもない。中国の古代の觀音の靈験の物語は、ずっと流傳してきた。さまざまな人物と物語、それぞれの階層、各種のストーリーには、すべて相應する現われがある。特に六朝の段階では、君主から平民まで、すべて相應する靈験があつた。觀音が難を救う靈験は、けつして現代社会にまで延長することができない。現代社会の天災地変の種類と範囲も大いに増加したからである。現代の葬儀の方式の変化によつて、死者を救済する地蔵信仰が民俗に深く浸透した程度は、また古代とは比べることができる。

宗教が現代社会のなかで占める地位と働きは減少した。たとえば古代社会と比較すると、仏教の古代の精神生活のなかの地位は重要であり、すでに伝統文化のなかの重要な支柱となつた。ところが、工業社会の發

展にともない、商品の消費文化は日に日に生活方式の主流となり、いつのまにか宗教信仰の伝統に対しても圧迫し、映像文化の娛樂の方式の性質も、人々の精神の追求を消失させている。また交通の発展と情報の流通とともに、各種の異なる宗教がたがいに伝播し、仏教は歐米の西洋国家において一定程度の發展を獲得した。しかし、キリスト教などの西洋の宗教も東洋の国家において伝播した。古代宗教の多くの面は、現代社会において文化と藝術の形態として扱われ、古代文化の遺産の一つの重要な面を体现したものとなつた。たとえば古代の僧が念誦し、訳注した仏教經典は、現代の大学、研究所のなかで、重要な関心を受け、研究討論されている。その哲学、思想、歴史、信仰の内容は、整理、研究、討論されている。現代社会の古代文明、文化、社会に対する理解は、一種の知識体系の教育のなかに築き上げられている。古代の石窟と廟の建物で、貴重な文物の価値を持つものは、国家の各等級の遺産、ひいては世界の文化遺産として保護され、観光案内をされる。ところが、博物館、美術の展覽、公

大きな需要であることを物語ついている。しかしま一方では、現代社会は宗教の精神に対してもさらにも高い要求を持つている。伝統宗教のなかの度を越した功利性のある、仏・菩薩に対する救済を求めての挾礼、「求められれば必ず応じ」、先に求めて得た後にさらに願うという仕方の崇拜は、今に至るまでなお流行しているけれども、けつして真正な宗教精神を体现したものではない。したがつて、我々は觀音と地蔵の信仰のなかの無限の慈悲、広く深い大願という真正な精神の核心を唱道し、それが現代社会のなかの多方面において機能を發揮し、人々の心と精神の境界を淨化し、向上させるようにしなければならない。

現代社会の複雑多様な環境のなかで、新興宗教も不斷に発生発展している。新興宗教のいくつかのものは、伝統宗教のなかのすぐれた伝統を繼承し、また現代社会に適応する努力をなした。しかしまいくつかの悪い邪教が発生し、反社会、反人類の劣悪な本質を備えている。この面は、現代社会の環境、心理の二大領域が日増しに発展するなかで重大な問題を露呈しており、宗教の精神と関心が、なお社会のきわめて

注

(1) 巴宙教授の『弥蘭王所問經』の分析によれば、原始小乘仏教のなかにも、利他の精神の要素がある。たとえば、「もし人が百年の間、その為す善を他人に廻向する場合、くり返し廻向するとき、善はさらに増加する。彼は彼の望むどのような人とも、その善を分からち受けることができる」とある。功德を廻向す

- (2) 「中華仏教百科全書」八 (台北出版、一九九四年)、四七一六頁、「業、業報、業障、業感縁起」などの項目。
- (3) 敦煌写本ペリオ3510号貝葉本の第十一から第十七葉までも、表裏両面に書かれ、それぞれの面に三行、晚期のコータン語であり、梵本の『大本』の前半部分に相当する。Prod. Oktor Skjærvø, *The Khotanese Hfdayasutra, A Green Leaf, Papers in Honour of Professor P. Asmussen*, 1988. ベーリーにも転写がある。Khotanese Texts III を参照。『敦煌学大辞典』(上海辞書出版社、一九九八年一一月、上海) 五〇〇頁の当該項目を参照。
- (4) 敦煌写本ペリオ3513号貝葉本の第十三から第四二一葉までも、表裏両面に書かれ、それぞれの面に四行ある。内容は唯識宗に属する。Lewis Lancaster, *A Study of a Khotanese Prajñāparamitā Text, Prajñāpāramitā, and Related System* 1977. 『敦煌学大辞典』(前掲同書) 五〇〇頁の当該項目を参照。
- (5) ペリオ2925号の2。同類の文書は、さらにペリオ5537号Ch(千仏洞) 0044と見える。張廣達、宋新江「巴黎国立図書館所蔵敦煌于闐語写卷目録初稿」(『于闐語写卷目録初稿』) 17頁。
- の経典の性質と特色を確定した。
- (11) 『北京大学藏敦煌文献』② (上海古籍出版社、一九九五年)、カラー写真17など。
- (12) 張惠明訳、ディヤコーノワ・N・V、ルドルフ・M・L「科洛特闍夫、H.H.収集の千手觀音像絹画—兼談公元九十一世紀吐魯番高昌回鶻宗教的混雜問題」(『敦煌研究』一九九四年四月)。艾伯特「伯孜克里克的千手觀音絹画」(一九八七年敦煌会論文石窟藝術編、遼寧美術出版社、一九九〇年、沈陽)。
- (13) 『敦煌学大辞典』(前掲同書) 五〇五頁。
- (14) Pelliot Sogdian 7, 判法訳、邦旺尼斯特(E. Benveniste)著「粟特語文獻選刊」(Codices Sogdiani)」(『粟特語文獻 (Textes sogdiens)』)
- (15) Or.8212 (英國図書館所蔵粟特語文獻) および上記の「粟特語文獻選刊」(『粟特語文獻』)
- (16) Pelliot Sogdian 14, 判法訳、邦旺ニース特(E. Benveniste)著「粟特語文獻選刊」(『粟特語文獻』)。日本の吉田豊によつて比定された。
- (17) Pelliot Sogdian 8, 判法訳、邦旺ニース特(F. Benveniste)著「粟特語文獻選刊」(『粟特語文獻』)。英國所蔵の同絃は『印度学伊朗学選刊』において刊行されてい
- (18) 上海古籍出版社とロシアの共同出版である。府憲展は「敦煌文獻辨疑錄」(『敦煌研究』一九九六年第二期) 八八頁において、この文献は西夏の黒水城の文
- 利益する菩薩行である。これは巴苗の漢訳した『南伝弥蘭王所問經』(中国社会科学院出版社、一九九七年一〇月、北京) 一一頁を見よ。
- (6) Or.8212号、ペリオ2029号、ペリオ2782号のなかの部分である。『敦煌学大辞典』(前掲同書) 五〇一頁。
- (7) 前注5の張広達、宋新江の同論文、一八七頁。
- (8) 『敦煌学大辞典』(前掲同書) 胡語文獻部分。張広達、宋新江「敦煌『瑞像記』、『瑞像圖』及其反映的于闐(『于闐史叢考』、前掲同書) 一一一七九頁。
- (9) 窺基の漢本から訳した回鶻文の『妙法蓮華經玄賛』は、敦煌第464窟から出た元代の写本であり、スウェーデン人種学博物館 (The National Museum of Ethnography) が「葉を所蔵し、他の三十四葉は行方不明」であり、日本の羽田は写真六十八枚を所蔵している。ドイツの探検隊はトルファンで発見した写本(題に沙州という字句があり、敦煌から来たものかもしれない)と、ペリオが敦煌で手に入れた五葉の残卷とは同じ本であるはずであり、元代の写本と比べると早い。『敦煌学大辞典』(前掲同書) 当該項目、四九四頁。
- (10) この経本の比定には一つの過程があった。最初、羽亭亨は『俱舍論安慧実義疏』の一部分であると誤認し、一九七〇年、スナシテキン (Sinasi Tekin) が韻詩(本生物語)であると分析し、一九七九年、庄内垣正弘は『東洋学報』五八「ウイグル語写本・觀音經相應」—觀音經に関する'avadana'」、一九八二年の專著『三篇与觀音經相應的譬喻譯』で、やつとこ
- 献であり、敦煌の文献ではないといつてゐる。メンシコフ「黒水城出土漢文遺書叙者錄」一九九号は、「祈禱の時に読む偈と陀羅尼の文集である」と定めた。『中華仏教百科全書』(前掲同書) の「大乘莊嚴王經」の項参照。
- (20) 汪娟「敦煌写本「觀音禮」初探」(『吳其昱八秩華誕敦煌學特刊』、一九九九年六月、台北)
- (21) 周一良「跋觀音偈贊」(周一良、錢文忠訳)『唐代密宗』、上海遠東出版社、一九九六年七月、一二一八—一二三三頁)
- (22) 汪娟「歷代地藏儀儀析論」(『仏學研究中心學報』第四期、台灣大學仏學研究中心、一九九九年) 一七二頁。
- (23) 雲南風儀県の北湯天で、一九五六年、ひともとよりの大理国(大理)の仏教典籍を発見した。また個人のコレクションから探査したものも多い。侯沖「雲南阿吒力教經典及其在中国佛教研究中的價值」(方廣鉅主編『藏外仏教文獻』第六輯、二二七—二三三頁)。写本の原題は、余杭沙門元照集とあり、現在、清の康熙年間の題記を備えており、整理者は、余杭沙門が宋代の時の人であると考えている。玉溪県の延光居士は、旧写本『地藏菩薩慈悲救苦薦福利生道場綱要』と『薦福利生慈悲救苦地藏尊經密教卷上』を所蔵しており、

儀軌の部分の内容とだいたい同じであり、すでに对校本とした。一九五六年、雲南風儀の北湯大の董氏の祖廟で発見されたひとまとまりの阿吒力教の典籍のなかに、さらに多くの重要な地蔵の典籍があった。たとえば雲南図書館に所蔵される『地蔵科上』、『地蔵科儀』の写本などである。参考にすることができる。

- (24) 彭金章「敦煌莫高窟北区洞窟所出多種民族文字文献和回鶻文木活字綜述」(『敦煌研究』二〇〇〇年一期)
(25) 高士榮・楊富學「漢伝仏教對回鶻的影響」(『民族研究』二〇〇〇年五期) 七一一七六頁。
(26) 僧伽羅克悉多比丘撰「仏教」(A. L. 巴沙姆主編『印度文化史』第八章、商務印書館、一九九七年一月)

(ちょう そう／中国社会科学院世界宗教研究所副研究员)
(訳・かんの ひろし／創価大学教授・東洋哲学研究所研究员)